

# 令和6年度(2024年度)の瀬田川のシジミ資源モニタリング

大植伸之

## 1. 目的

シジミの漁獲量が低迷している瀬田川では、漁協を中心とする活動組織が、近江大橋以南の南湖および瀬田川でシジミの生息密度調査等を実施している。そこで現場では調査結果の解析に加え、肥満度を測定することにより、シジミ資源状況を評価した。

## 2. 方法

本調査は2017年から開始され、原則として4~12月に毎月実施されている。活動組織が調査定点とする20地点のうちの3地点において、貝搔網3曳網で採捕されたシジミの個体数と殻長を調査した。採捕されたシジミは2mmの篩で選別して残ったもののみを対象とした。殻長組成から年級群分解を行い各年級群の個体数を推定し、搔網面積を0.6m<sup>2</sup>として生息密度を推定した。また、採捕された18mm以上の親貝の肥満度を3地点で各月12個体ずつ測定した。加えて、琵琶湖環境科学研究センターがホームページで公表している瀬田川のプランクトン量との関連を考察した。

## 3. 結果

前年生まれの2023年級が7月から顕著に多く採捕された。その密度は8月のピーク時で787個体/m<sup>2</sup>であり、2017、2019、2020年級群より高く、2021、2022年級群と同程度の値であった。(図1)。これは産卵期である2023年の5、6月の親貝の肥満度が調査を開始した2017年以降3番目に高い4%を超える値であったことが要因であると考えられる(図2)。一方で2024年の親貝の肥満度は、産卵期である5、6月には2023年と同程度の値を示したものの、10月以降大きく低下し、11月以降は調査開始以降最低の2.3%に満たない値となり、2025年の産卵が懸念される結果となった。

また、2024年は各年級群とも成長が悪く、漁獲に貢献すると期待されていた2021年級群が漁獲サイズ(殻長18mm)に達しないといった事象も見られた。これらは貝類の成長期である8月中旬以降にシジミが餌として利用できない藍藻が多く発生し、シジミの成長が停滞したため、秋以降も餌となる珪藻が増加せず、産卵後の肥満度が回復しなかったことが要因と考えられる。これらのことから、2025年産卵期の肥満度が低く産卵量が少ないことが予想されるため、今後も状況を注視する必要がある。

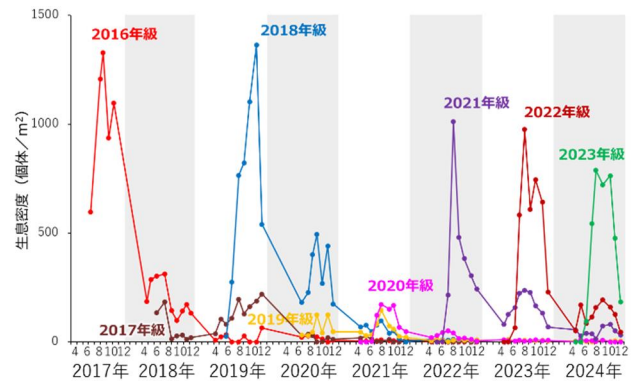


図1 生息密度変化

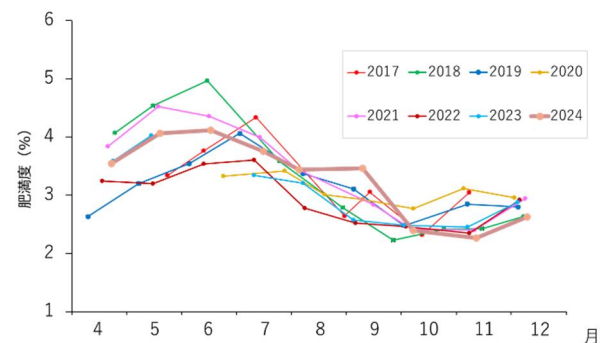


図2 各年のシジミ肥満度の変化